

東北支援を経験して在宅医療の充実に向けて  
隠岐島前病院外来看護師の取り組み

島根県隠岐広域連合立隠岐島前病院  
看護師長 松浦 幸子

2011年3月11日東北大震災がおこり2年が経過しているも、震災の痛みは消えることなく、復興への願いは強まっている状況がある。

日本海に浮かぶ小さな島々、隠岐諸島にある隠岐島前地域は3つの有人の島（西ノ島、中ノ島、知夫里島）をいう。隠岐広域連合立隠岐島前病院は、西ノ島にあり、島前地域（人口6095人、高齢化率39.8%）の唯一入院設備44床（一般病棟20床、医療療養8床、介護療養16床）を有し、職員は常勤医師6名、薬剤師1名、看護師25名、他コメディカルスタッフを含め全職員数は70名で中核医療機関としてその役割を担っている。

震災直後には、「小さな島からでも何かお手伝いができれば・・・」との思いから、2011年5月9日から8月6日までの3か月間、被災地で立ち上がっていた気仙沼市在宅支援プロジェクトに参加させていただいた。言葉にできない被災地の被害の大きさを目前に「お手伝いをさせていただく」という私達の思いは、患者さんやご家族の皆さんの感謝の言葉に反対に励まされ、全国から集まった在宅医療に関わる人たちとの出会いで多くの学びとなった。気仙沼市在宅支援プロジェクトの事務局は全国からの医療スタッフの受け入れ、被災地の患者さんへの対応など、これらのマネジメントがとても素晴らしく実践できていた。特に充実したカンファレンスを行うことによって短期の支援による継続的なケアを可能にしていた。

この被災地支援の経験から再び自分たちの現場に帰り、当院での外来看護師の取り組みを検討した。外来受診している患者さんは夜間や休日に緊急受診をすることがある。外来看護師たちが外来カンファレンスを、毎日行うことで情報を共有し、緊急時や再来時の対応、訪問看護、福祉サービスの導入等が適切にスムーズに行えるようになった。在宅生活を少しでも長く安心して過ごせるようにと始めた外来カンファレンスの取り組みを、症例を通して紹介したい。